シログチ

栗原峰幸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
シログチ

【Ｎコード】
Ｎ４１２１Ｉ

【作者名】
栗原峰幸

【あらすじ】
中学受験を控えた渡辺良雄。スーパーのパートで息子の塾代を稼ぐ母、房子。堅物で万年係長の父、悦雄。この家族関係は良雄の受験を機にやや冷めていた。悦雄は職場の釣り倶楽部で沖釣りに行くことになり、家族をイシモチ釣りに誘う。

前編

「そんなこと言ったって、塾だから行けないんだ。仕方ないだろ！」
渡辺良雄は電話の受話器に向かって叫んだ。受話器の向こうからは、やはり何やら怒鳴り声が聞こえる。
「そんな、学校祭の準備なんかやってる暇はないんだ。俺には中学受験がかかってるんだよ！」
良雄は更に声を荒げる。受話器に唾がかかった。だが相手も負けてはいない。金切り声が居間に響いた。
「もう、これ以上、お前たちの相手はしていられないよ」
良雄をため息交じりにそう言うと、電話を一方的に切った。
ツーツーという音だけが、空しく受話器から聞こえる。
振り返ると時計は午後五時を指していた。
「いけね」
良雄は慌ててバッグの柄を握った。その仕草は正に「掻っ攫う」という表現がふさわしい。
良雄が握ったバッグには有名進学塾のマークが大きく描かれている。
バッグを背負った良雄が走る。その姿に、かつて陽が暮れるまで遊びほうけた子供の姿はない。
良雄の背中がコンビニエンスストアの中へと消えた。程なくして出てきた時には、口にパンを咥えていた。そして片手には栄養ドリンク。
良雄は有名進学塾のバッグを背負ったまま、人込みの雑踏の中へと消えていった。
「ただいまー」
背中を丸めて家の玄関を良雄がくぐったのは、二十二時を回ってからだった。

「お帰りなさい。遅くまで御苦労様ね」
母親の房子が居間から顔を覗かせた。
良雄は塾のバッグをおもむろに放ると、台所の食席に着いた。そこにあるのは、既に冷めたカレーライスだ。だるそうにスプーンを拾って、カレーを口に運ぶ。
特に美味くもなければ、不味くもない。何度も食べなれた味が、ただ冷えて口の中に広がるだけだ。ジャガイモが少し硬かった。それに豚肉もまるでガムだ。噛んでも、噛んでも飲み込めない。
カレーのエッセンスを加えた冷や飯。そんな表現がぴったりだった。それでも良雄は文句を言わぬ。ただ黙々と黄色い飯を口へ運ぶだけだ。
居間からはテレビの音が聞こえる。バラエティー番組だろうか。芸人とは呼べない芸のない芸に、房子が時折、軽薄な笑いを浮かべているのがわかる。
（ふん、あんな芸人のどこが……）
良雄は心の中で、お笑い芸人を嗤った。
良雄の学校でも、お笑い芸人は人気がある。時には良雄もそのネタを真似することもあった。
しかし、良雄はその芸を認めていたわけではなかった。ただの流行で廃れるのは時間の問題だと思っていたのである。自分で芸人のネタを真似しながらも、どこか値踏みをし、軽蔑していたのである。
芸人のネタはただ友人との会話をつなぐ道具に過ぎなかった。
（友達、友達かぁ……）
良雄は心の中で深くため息をついた。
「あ、そういえば、さっきクラスの風間君から電話があったわよ」
房子が良雄の背中にそう声を掛けた時、良雄はカレーライスを食べ終わっていた。
「学校祭のことだろ？」
皿をシンクに無造作に置きながら、良雄が尋ねた。
「そう。明日の放課後、クラスで準備するから手伝ってくれないか

って言っていたんだけど、塾があるから無理って断っておいたわ」
「昼間も電話があって断ったんだ」
「そうよね。私だって、パートに働きに出て塾代稼いでいるんだから、中学受験に向けて頑張ってもらわなきゃ」
良雄はそれには答えず、塾のバッグを手にすると、二階へ上がろうと廊下へ出た。居間からは煎餅を齧る音が聞こえた。
するとそこで玄関が開いた。父親の悦雄の帰宅である。
「ただいま。良雄は今日も塾通いか。毎日、精が出るな」
悦雄の目尻が少し垂れている。その瞳は慈しみにも似た色を湛えていた。
「おかえり。父さんも毎日、残業大変だね」
良雄はボソッと呟くと、バッグを抱えて二階へと上がった。

良雄は自室のデスクへ向かうと、ワークブックを開いた。塾通いをしてなお、まだ勉強をしようというのか。
良雄のシャープペンシルを握る手が機械のように動いていく。確実に、決められた時間内に問題をこなし、回答を記入していくその様は勉学というより、技術に近いものがある。そう、良雄は受験というイベントを成功させるための技術者として養成されつつあるのだ。
一通りの流れをこなし、良雄がシャープペンシルを置く。その目はやや充血気味か。
「はあ」
少し疲れたのだろうか。良雄の口からため息が漏れた。両手で瞼を覆い、しばらく動かぬ。
こうした時、人間とは他の五感、特に聴覚などが鋭くなるものである。今、良雄の耳はあらゆる雑音を捉えていた。
「まったく、万年係長なんだから、残業なんてしなくてもよさそうなものを」

母親の房子の厭味たっぷりな愚痴が聞こえる。
「俺がいるから、うちの職場は成り立っているんだ。所詮、女のお前に言ってもわからんだろうがな」
「あら、私だってパートに出ていることをお忘れにならないでくださいましよ」
房子の声がヒステリックに引っ繰り返った。
「スーパーのレジ打ちと生活保護の仕事を一緒にしないでくれよ」
「そもそもあなたの稼ぎが少ないから、私が良雄の塾の費用を稼いでいるじゃない」
「その塾なんだが、わざわざ中学から私立に行かせる必要があるのか？」
その言葉に良雄自身がギクッとした。
「あなた、何を言い出すのよ。今更」
「何か、親の敷いたレールの上を歩いているようで、良雄自身の主体性が見えてこないんだよな」
良雄は耳も塞ぎたかった。だが、この会話の顛末を聞いていたい気もする。ヤジロベエのような危うさで、良雄の心は揺れ動いていた。
「あなたのように、公務員になれたはいいけど、万年係長じゃあ良雄だって可哀想ですからね。ちゃんと、いいところの大学に入って、いいところに就職して」
「意外とエリートはつまずくと後がないぞ。それより、あいつ自身はどう考えているんだろうか？」
「そりゃあ、受験するつもりでいますよ。今日だってクラス委員から学校祭の手伝いのお誘いがあったんだけど、断っていますからね」
「何？　それを許したのかっ！」
悦雄の声が一段と大きくなった。ここで良雄はついに目ではなく、耳を塞いだ。
激しく言い合いをする父と母の声を遠くに聞きながら、やり過ごす。

塾のために学校祭の準備を断った自分の判断は、その時は正しかったと良雄は思っていた。しかし、現実にはそのことで父と母が言い合いをしている。
「くうぅぅぅ！」
良雄が歯を噛み締めた。歯痒く、こんな釈然としない思いはいつ以来だろうか。
ドスン、ドスン、ドスン！
無骨な足音が階段を上ってくる。
ドン、ドン！
荒々しく良雄の部屋のドアが叩かれる。
「良雄、ちょっと話がある。出てきなさい」
「学校祭のことだろう？」
良雄が扉を睨みながら言った。
「そうだ」
悦雄の剣幕は、荒い鼻息まで聞こえてきそうだった。
「それって、お父さんの意見、それともお母さんと話し合って折り合いをつけた意見？」
良雄は椅子から腰を上げることなく、扉の向こうにいる父親に向かって吐いた。
「えっ？」
父親が狼狽するのがわかった。空気が一瞬、濁ったのだ。和らいだのではない。意表な問いかけにより混ざった不純物が、張り詰めた空気を濁らせたのだ。
「親として統一した意見を持ってきてくれなきゃ、俺はお父さんとお母さんのどっちを信じればいいのかわからないじゃないかっ！」
良雄はそう言い捨てると、ベッドに身を投げた。
扉の向こうでは父親が呆気に取られた顔をして、立ち尽くしているのだろう。良雄には何となくそんな、弛んだ空気が伝わってくる。
ギーィッ、キューッ、ギーィッ。
軋んだ音を立てて、悦雄が階段を降りていく。心なしかその音が

寂しげだ。まるでむせび泣くかのようなその音は、悦雄の心の嗚咽なのだろうか。
良雄はその音を聞いていた。胸に染みる音だった。心の隙間から入り込み、骨の髄まで染み入る音だった。

翌日の帰りのホームルームは、まるで裁判のようだった。
「渡辺だけだよ。学校祭に協力しないのは」
クラス委員の風間に言い寄られ、良雄は身体が5センチほど後ろにのけ反った。クラスのみんなも良雄に冷ややかな視線を向けている。
（嘘だろ、おい。及川や笹山も塾を優先するって言っていたじゃんかよ）
頼みの綱の及川や笹山は下を向いている。きっと風間の熱意に屈したのだろう。
「このままじゃ、君はみんなにクラスの一員として認めてもらえなくなるぞ。それでもいいのか？」
風間は更に詰め寄った。
「まあまあ、風間も熱くならないで」
担任の広瀬先生が風間を制した。しかし、広瀬先生とて必ずしも良雄の味方であるわけではなかった。
「なあ渡辺、学校祭と言ったら、クラス一丸となってやる行事だ。しかも今年は小学校生活最後の学校祭だ。みんな、思いを一つにしてやり遂げたいんだよ」
広瀬先生が良雄の肩に手をポンと置き、諭すように言った。
針のむしろだった。四面楚歌とはこのことを言うのかと、良雄はワークブックにあった四字熟語を思い出す。こうなっては協力せざるを得ない。本意ではないが、塾は諦めることにした良雄だった。
「テメエじゃ話になんねえんだよ。市長を出せ、市長を！」
市役所の一階の隅でわめいている男がいる。白髪でやや小太り、

身なりは薄汚い。男から立ち込める臭い。それはアルコール臭だ。
男は真っ昼間から酒を飲み、市役所の窓口で文句を言っているのだ。
「だから、そのことにつきましては私が担当ですから」
若い職員が窓口越しにそう言うが、男の威圧的な態度は変わらない。
「うるせえ。オメエは口答えするんじゃねえ。市長を出せって言ってんのがわかねえのか、この野郎！」
若い職員は肩をすくめ、チラリと後ろを見やる。その視線の行く先は係長、渡辺悦雄だった。
悦雄は男を無視していた。ただ寡黙にケースファイルという書類に目を落としている。
「野地君！」
悦雄が男の対応をしていた若い職員を呼び付けた。家では決して見せることのない、厳しい目付きだ。
「この新規ケースなんだが、就労中の発病だから障害年金とれるかもしれないね。精神保健福祉手帳2級所持だから障害者加算のイがつけられるよ」
野地が「はあ」と生返事を返す。
「ちょっと、コラァ！　こっちはどうしてくれるんだ？」
業を煮やした男が、窓口をドンと叩いた。さすがに電算機を打っていた女性職員が「きゃっ！」と声を上げた。
「あほんだら。昼間から酔っ払って市役所の窓口、来る奴が税金で飯食えるわけないだろう！」
悦雄が立ち上がりながら、男を睨みつけた。悦雄はそのまま男に近づいていく。
「この野地はな、あんたのために何度も職安に一緒に行っただろう？　そうしてやっと決まった仕事を蹴っておいて、生活保護を頂戴っていうのはおかしいんじゃない？　納税者の皆さん、納得しないよ。あんたの生活保護の申請が却下されたのは当然だね。最初に言ったでしょう。働ける場合は働きなさいって。それが条件だからね。

今からでも頭下げて雇ってもらわなきゃ、あんた本当に日干しになっちゃうよ」
「じゃあ、あんたは俺に死ねって言うのか？」
「そうは言わないよ。でも自分で道は見つけるんだね。とにかくあんたは保護を受ける資格がない。現に生活に困ったと言いながらも、酒を飲む余裕があるんだからね」
「じゃあ、俺はどうすればいいんだよぉ」
男は急にベソをかきはじめた。悦雄は知っている。得てしてこのタイプの男は自暴自棄になりやすく、依存的であることを。そのくせにプライドだけは人より高かったりするから始末が悪い。実際、この男は生活保護を申請し、金銭がないと訴えるにも関わらず飲酒をしては市役所の窓口で苦情を訴えるのだ。野地はこの男のために職安に足繁く通い、仕事をみつけたのだが、それを理由もなく断ったのだ。
生活保護は生活に困窮するすべての国民を対象とはしているが、資産やその能力をすべて活用することが条件となっている。この男の場合、活用すべき稼働能力を恣意的に拒否したわけであるから、保護の申請が却下されても致し方ないと一般的には言えよう。生活保護とは国民の税金を無償で与え、自立に導かねばならない。その審査が厳しいのは当然のことである。
一見すると、悦雄の吐いた言葉は非情に厳しいように思える。しかし、これはこの男に真の自立へと導いているのだ。そして、これが福祉事務所の現場の真の意見なのである。
「だから、もう一度頭下げて雇ってもらうしかないね」
男のすすり泣く声が市役所のロビーの片隅に響いた。
悦雄は心得ているのだ。これ以上の恩情をかけても、男のためにはならないと。ここは男が自分自身の力で困難を脱出するより他はなかった。
悦雄は踵を返し、男に背を向けると、再び野地に尋ねる。
「この姉と共有名義の山林なんだけどね、法第６３条による返還の

対象となることを前置しておかないとならないね。その辺を注意してもう一度、新規記録を書き直してくれるかな？」
「えーと、障害年金と障害者加算のイ、それと山林の法第６３条前置と。わかりました」
「ところで、明日の決裁で法定期限の１４日だぞ」
「あ、いけね。また圧力団体から電話攻撃もらうところでした。今日も残業、がんばりまーす」
野地がややもすると卑屈な笑いを浮かべて背伸びをした。その背中を悦雄がドンと叩く。そして小声で囁いた。
「さっきみたいな奴は俺に任せていいよ」
「ありがとうございますっ！」
野地が深々と頭を下げた。悦雄はニヤニヤ笑いながら給湯室の方へ消えていった。

房子は愛想笑いを浮かべながらレジを打っていた。とは言ってもバーコードを機械が読み取り、客の売上額がレジに表示される。それを機械の手先となって復唱するのだ。
「１２９８円でございます」
小太りの中年女性が目を少し吊り上げて、房子を睨んだ。
「ちょっと、マグロの中落ち、特売の価格になってる？」
「はい、４８０円となっております」
房子はこのテの客の対策のために、目玉商品の価格くらいは覚えておくようにしていたのだ。
それでも中年女性はブツクサ何か言いながら、１３００円を無造作に置いた。房子はそれを、恭しくでもなく、掻っ攫うようでもなく、レジの中へと放り込んでいく。レジから2円のお釣りとレシートが吐き出された。
「ありがとうございました」
口元は笑っているが、目は決して笑ってはいない。房子の笑顔は作り物だった。

房子はこれも良雄の将来のためと思って我慢しながらも働いている。しかし、最近はどの顔が自分の顔なのかも既にわからなくなっていた。

泣くこともなく、ただ作り笑いだけの生活が自分を蝕みかけているような気がした。

先日、ふとラジオから懐かしい曲が流れたことを思い出す。井上陽水の「灰色の指先」という曲だった。アルバム「Ｗｈｉｔｅ」に収録されたこの曲は、地味な印象だが強烈な個性を放っている。

房子は井上陽水のファンだった。個人的に「Ｗｈｉｔｅ」は好きなアルバムで、よく聴いた。

そんな歌詞の主人公に自分を重ねてみる。プレス加工で指紋もなくし、街の雑踏に紛れて見えなくなる歌の主人公と自分の境遇がどことなく似ていた。

時々、すべてを投げ出してしまいたい時がある。町中で大声を上げて叫び出したい衝動に駆られる時がある。

房子には今を変える「何か」が欲しかった。それは手を伸ばせば届くところにありそうだが、手を伸ばす勇気もなかった。「何か」とは、もしかしたら、表面上はすべて丸く収まっている今を、すべて壊してしまうもののような気がしたのである。それはやはり「Ｗｈｉｔｅ」に収録されている「青い闇の警告」のような気がしてならなかった。

「ありがとうございました」

房子はまた作り笑いで客を送り出す。

「いらっしゃいませ」

そしてまた、客を迎える。それはベルトコンベアに乗せられているのと、なんら変わりはなかった。

男子のみんなが一斉に段ボールを切り始めた。良雄も同じように、段ボールを切る。学校祭で良雄のクラスは「お化け屋敷」をすることになっていた。まずは迷路作りだ。女子は衣裳を作ったりしてい

る。
「渡辺は最後まで抵抗したから『ぬらりひょん』でもやってもらうか？」
風間が笑いながら言った。するとすぐに「じゃあ、頭を丸めないと」と言う奴がいる。
クラス中が爆笑の渦になった。
良雄は一瞬、ムカッときたが、今その態度を表に出せば損をするのはわかっていた。
「坊主頭なら野球をやってる奴に頼めよ。俺はもっと恐ろしいのをやってやるぜ」
「恐ろしいのって何だい？」
風間が興味深そうに近寄ってきた。
「三丁目のヤクザ」
またクラス中に爆笑が起こった。
「まじめに考えろよ」
「じゃあ、俺の両親が秋田の出身だから、『なまはげ』なんていうのはどうだ？　暗がりの中で『悪い子はいねえがぁ』ってやったら、一、二年生なんかチビッちゃうよ」
「おお、それいいかもな。いつかテレビで観たことあるぞ」
「うちに小せえ人形さあるから、そいつさ持ってくんべ」
良雄が東北訛りのイントネーションでおどけると、また笑いが湧いた。この時、良雄は笑いが心地よかった。他人と話して笑うことなど、ここ数カ月もなかったような気がする。
みんなと一つの作業をし、一体感を得る。これは塾では味わえないことだ。塾は常に競争社会であり、周囲はすべて蹴落とすべき敵だった。交わすあいさつも、偽りの笑顔に過ぎない。
それが今はどうだ。そんなしがらみから解放され、心の底から笑い、人と人との触れ合いができる。そこから人は多くのことを学び、感じ取っていく。他のみんなにとっては当たり前のような時間が、良雄にとっては至福の時間となっていたのだ。

きっと広瀬先生も、これを良雄に体験させたかったに違いない。
「よし、『なまはげ』作りはまかしたぞ」
風間がニヤッと笑った。良雄もニヤッと笑い返した。
そんな二人のやりとりを広瀬先生は、少し遠い場所で微笑みながら眺めている。

悦雄は野地が新規の生活保護ファイルを仕上げるのを、ただひたすら待っていた。
野地は必死の形相でパソコンに向かっている。いや、野地だけではない。この市役所の生活福祉課のほとんどの課員が残業組だ。生活保護の現場とは常に残業の嵐なのだ。下手をすれば土日も出てくる者もいるくらいである。そこに安穏とした公務員の姿はなかった。
「宮川、下平さんの過払いどうするんだ？　このままじゃ、地方自治法第１５９条による戻入か、積み上げ認定だぞ」
悦雄がボソッと呟いた。宮川と呼ばれた中年の職員がハッとして顔を上げる。机の上には数冊のケースファイルが散乱している。
「戻入や積み上げ認定は厳しいですね。何せ、冷蔵庫がぶっ壊れて新しいのを買いましたから」
「じゃあ、法第８０条免除か？　だったらきちんと検討でその理由を書いておけ」
「はい」
宮川がせわしなくケースファイルを引きずり出す。机の上がまた乱雑になった。
「よう」
その時、悦雄に親しげに声を掛ける者があった。悦雄が振り向くと同年配の男が立っている。
「おお、田崎、久しぶりだな」
「竿鱗会の件でちょっと」
「おお、もうそんな時期か？」
「俺、幹事なんだよ」

「ま、ここじゃ何だから、給湯室でも行こうか。面接室は嫌だろう？」
悦雄が豪快に笑った。田崎は照れたように笑い返す。
「みんな席をちょっと外すぞ」
そう言って悦雄は腰を上げた。心なしか課内の空気の緊張が少しほぐれたような印象を受ける。ただ、野地だけが悦雄の背中を目で追っていた。

房子の仕事はスーパーのゴミ出しで終わる。本当はレジ打ちのみの契約内容だったのだが、店長から命ぜられたのでは断るわけにもいかなかった。
大量のプラスチックのトレーや、ビニール袋、そして消費期限の切れた食材を廃棄する。食材を廃棄する度に房子は思う。
（今の日本って、どこかおかしくないかしら？）
食の安全を謳い、大手業界による賞味期限の改ざんが取り沙汰される昨今ではあるが、廃棄される食材を見ては、胸が痛むのだ。
（これで救える人はいないのかしら？）
以前はよく、ホームレスが消費期限切れの弁当を大量にもらいにきていた。しかし、スーパーの方針で今はそれも行っていない。
「奥さん、これ持っていきなよ」
房子の背後で声がした。房子はその声にハッとして振り返る。
そこに立っていたのは、鮮魚部門の若者だった。名前は知らぬが、顔は知っている。金色に染めた髪に、スラリとした体躯が今の若者らしい。それに、ちょいといい男だった。
その若者の手にはパック詰めされた銀色の魚が握られていた。
「この魚は？」
「イシモチだよ。馴染みがないのか、あまり出なくてね。足も速いし、もったいないから食べてよ。塩焼きでいいよ」
ちょうどゴミ出しを終えた房子は、若者の手から四匹のイシモチを受け取った。

若者の笑顔が爽やかだった。魚を受け取る時、指と指が触れた。その時、房子は指の毛細血管の末端まで、心臓の鼓動が響いているような気がした。

それは「灰色の指先」に「女」の生命を再び宿した瞬間でもあった。もっとも「青い闇の警告」でもあったのだが。

悦雄は給湯室で田崎と話を進めていた。

「もう竿鱗会のシーズンか。早いものだな。この前、六月にシロギス船を仕立てたばかりだと思っていたのに、もう十一月だものな」

竿鱗会とは市役所の釣り好きで作っているサークルで、年に二回ほど仕立船で沖釣りを楽しんでいる。無論、悦雄もメンバーの一人だ。田崎が今回、それの幹事だということである。

「そうなんだよ。走水のアジが釣りたいって言う人がいるんだけどさ。電動リールを持っていない人から反対意見も多くてね」

「そりゃ、そうだろう」

「かと言って、落ちギスにはまだちょっと早いし、ライトタックルアジなんかどうかと思うんだけど、お前の意見も聞きたくてさ」

「そうだなあ」

悦雄が腕組みをして考え出した。しかし、机に向かっている時の深刻さはない。

「係長、新規のケースファイル、できました！」

そこへ晴れ晴れとした表情の野地が飛び込んできた。

「悪い。一晩、考えさせてくれ。田崎は今、下水道課だったよな。内線は何番だ？」

「３８６」

「じゃあ明日、電話するよ」

悦雄の足がもう自分の机の方へ向きかけていた。

「悪いな、邪魔しちゃって」

その田崎の声はもう、悦雄の耳には入っていなかった。何やら野地と話をしている。そんな悦雄の背中を、田崎は笑いながらも、優

しい目で見送った。

後編

良雄と房子が帰ったのは、ほぼ同時だった。
「あれ、良雄、塾じゃなかったの？」
まだランドセル姿の息子の姿を見て、房子が驚いたように声を上げた。
「いやー、まいったよ。クラスで吊るし上げられてさ。結局、学校祭の準備を手伝う羽目になっちゃった」
「何ですって？　そんなことされたの、お前？　すぐ学校に苦情の電話を入れてあげるわ」
血相を変えた悦子が電話に飛びつこうとした。だが、それを良雄が制した。
「やめてよ、母さん。もういいんだ。もういいんだよ」
そう叫んだ良雄の顔は晴れ晴れとしていた。しかし、房子の顔から曇りは取れていない。
「だって良雄、あんたは中学受験に向けて今が大切な時期なのよ」
「卒業に向けても大切な時期でもあるんだ」
「はあーっ」
房子は深いため息をつくと、銀色の光沢を放つ魚に目を落とした。スーパーの若者からもらったイシモチだ。房子はそれ以上、会話をしようとはせず、キッチンへと向かった。
パックから口を半開きにしたイシモチを取り出す。少し生臭い魚の臭いが鼻先をかすめた。
房子は釈然としない胸の内をぶつけるがごとく、魚の喉元に包丁を入れた。あまり手入れのされていない包丁ではあったが、柔らかいその身は銀色の刃をすんなりと受け入れてくれた。
（締まりのない魚だこと）
房子は包丁を入れながら、そんなことを思ったりもした。ドロッとした血液が流れ出した。

「ただいまー」
玄関を開けて悦雄が帰宅した。
「父さん、お帰り」
良雄が居間から顔を覗かせる。房子は一言も発さない。
「おう良雄、お前、今日の塾はどうした？」
「学校祭の準備を結局、手伝ったんだ」
「そうか」
悦雄の目尻が下がった。そして、手が良雄の頭に伸びる。
「今日は早かったのね」
房子が捌いたイシモチに塩を振りながら、肩越しに言った。その言葉に抑揚はなかった。
「ああ、電算がストップしちゃってね。今日は早仕舞いだ。それはそうと、それはイシモチじゃないか？」
「そうよ。スーパーの魚屋でもらったのよ」
「魚屋のイシモチか」
悦雄が渋い顔をした。
「何か不満？」
房子が振り向き様にキッと悦雄を睨んだ。悦雄は肩をすくめておどけてみせる。その仕草がまるでピエロのようだ。
「母さん、機嫌が悪いな」
小声で囁きながら、悦雄が良雄の脇腹を突ついた。
「俺が今日、塾に行かなかったからね」
「やっぱり、それか」
悦雄がニタッと笑った。
「何をコソコソ話しているのよ。一体、私は何のためにスーパーでパートをしていると思っているのよ。それもこれも良雄の塾のためじゃない！」
イシモチをコンロに入れた房子が泣きそうな声で叫んだ。房子にとっては自分の働く意義が、今までの時間が否定されたような気持

ちになっていたのかもしれない。
「まあまあ」
悦雄が房子の肩を叩いてなだめる。だが、房子は肩を振って、頑なに周囲の空気を拒絶しようとしている。
「父さんも母さんも秋田の出身だったよね。『なまはげ』について教えてよ」
その良雄の言葉に房子が顔を上げた。頬に一筋の滴が流れている。そこだけ化粧がはげ落ち、肌の色が変わっている。
「いいとも。だが、何で知りたいんだ？」
悦雄が興味深そうに尋ねた。
「今度の学校祭でお化け屋敷をやるんだけど、俺は『なまはげ』をやることになったんだ」
良雄が得意そうに言った。その言葉を聞いて房子が悦雄の顔を見た。悦雄も房子の目を見つめ返す。二人はニコッと笑って頷いた。

食卓には焦げ目の少し付いたイシモチが並べられていた。白くなった目玉は、自分が食材になったことが信じられぬように、宙を睨んでいる。
悦雄はやや曇り顔でイシモチを眺めていた。
「どうしたの？　父さん」
良雄が父親の怪訝な顔を見て尋ねた。
「このイシモチはおそらく網で獲れたものだろう。だったら、あまり美味しくないよ」
「そうなの？」
房子が驚いたような顔で悦雄を見た。
「食べられないことはないが、水っぽくて締まりがない。場合によっては生臭い。イシモチは獲れたら、生き締めにしないと、美味しくないんだ」
「生き締めって？」
良雄が興味深そうに尋ねた。

「エラブタの付け根を切って、血を抜くんだ。他にもサバとか青い魚は生き締めをした方が美味しいんだよ」
「それで売れ残っていたのね」
房子が神妙な顔付きになった。
「いや、馴染みがないんだろうな」
だが、房子の顔は晴れない。鮮魚コーナーの若者の爽やかな笑顔が、したたかなほくそ笑みへと変わっていく。「青い闇の警告」はこうして、本当に警告を発しながら、房子を現在の生活に引き留めたのである。
「どれ」
悦雄が箸をイシモチに伸ばす。銀色の皮を毟り取り、白身と一緒に口へと運んだ。
「どうだい？」
良雄が興味津々の顔付きで、悦雄を覗き込む。
「ふむ。不味くはないが、やっぱり、ちょっと水っぽいな」
「いただきます」
良雄も箸を伸ばす。続いて房子も箸をつけた。
「ちょっと、だらしがない魚ね」
房子が苦笑いをしながら言った。おそらく彼女の脳裏には鮮魚部門の若者の姿が浮かんでいたに違いない。
若者は確かに見た目は良かった。それこそ、甘いマスクに髪を茶色く染め、そのスマートな姿態に房子も一時は、その心がときめいたりもした。しかし、房子にはやはり守るべき家庭が、愛すべき家庭がここにあった。そのことに改めて気付いた時、若者への憧憬は微塵もなく吹き飛んだのだ。
房子がイシモチを「だらしがない」と評したのも、若者への言葉と取るよりも、自分への戒めだったのかもしれない。
「そうでもないぞ。お前も以前に食べたことあるんだぞ。俺が釣ってきたイシモチを」
悦雄が得意そうに言った。

「あら、そうでしたっけ。いつもいろんなお魚を釣ってくるもんだから、忘れちゃったわ」
「わはははは！」
三人が大笑いをした。
「イシモチはな、頭の中に石があって、それで『イシモチ』って言うんだ。釣り上げると、ウキブクロをグウグウ鳴らして鳴くんだ。それが愚痴を言っているみたいなんで『グチ』と言うんだよ。関東で獲れるのは主に『シログチ』って言われている種類だ」
悦雄は釣りや魚の話になると、夢中になる。今まではあまり耳を傾けなかった房子だが、今日は真剣に聞いている。
「私もこの魚のように愚痴を言いたいわ」
「どんどん言えばいいさ。そう言えば、最近はみんな、時間帯がすれ違って夕食さえ一緒に食べることがなかったな」
悦雄がしみじみと言った。心なしかその瞳は潤んでいるようだ。
「この魚、美味しいよ」
良雄がポツリと言った。良雄は俯いている。
「えっ？」
悦雄と房子が良雄を見た。
「どんなに豪華な食事だって一人で食べると不味いもん。このイシモチだって、みんなで食べれば美味しいよ」
良雄の箸が震えていた。
「そうか」
隣に座る悦雄が、良雄の肩を抱き締めた。
「良雄、ごめんね」
房子がエプロンで涙を拭った。そして、箸を持つ手の上から、強く手を握った。
「よし、今度の日曜日、みんなで釣りに行こう。狙いはシログチだ。実は市役所の愛好会で計画があってね。企画の相談に乗っているんだ」
悦雄が良雄の肩を叩きながら言った。

「釣り？　もしかして、あのイソメとかいうムシを付けるの？」
房子がしかめっ面をする。だが、悦雄は言い出したら後へは引かない。殊更、釣りに関してはそうだ。
「大丈夫。俺が付けてやるよ」
「船酔いはしない？」
今度は良雄が心配そうに尋ねる。
「東京湾は波が穏やかだし、酔い止めを飲んでおけば大丈夫だよ」
悦雄がにこやかに答える。房子と良雄は顔を見合わせた。
実は良雄は日曜日、塾の模擬テストがあったのだ。しかし、今の良雄の心は釣りに傾いていた。
「家族で出掛けるなんて、いつ以来かしら？」
その房子の言葉に悦雄と良雄の顔がほころんだ。

翌日の朝、市役所の給湯室に二人の男を見ることができる。無論、悦雄と田崎だ。
「なあ、今度の竿鱗会なんだが、シログチにしないか？」
悦雄が湯飲みに入った茶を啜りながら呟いた。
「シログチって、イシモチのことだろう？　イシモチか、イシモチねえ」
田崎の態度は煮え切らない。腕組みをして、深く考え込んでしまった。
「何か、不満か？」
「いや、前回がシロギスだったし、小物が重なるじゃないか。イナダの声が上がっているんだよ。それにマイナーな釣り物だよ、イシモチは。キス釣りやアジ釣りのゲストのイメージが強いな」
「意外と専門に狙ってみると面白いんだよ。なかなか食い込まなくって。それに生き締めにすると、刺し身でもイケる。金沢八景あたりじゃ、専門に狙っている船宿もあるくらいだ」
悦雄は渋る田崎に食い下がった。女房と息子に約束をした以上、もう後へは引けなかった。何としてでも田崎を説得するしかない。

「うーん」
田崎は腕組みをしたまま固まってしまった。
「おはようございます」
そこへ野地がポットへお湯を入れにやってきた。課内でも一番若手の彼は、いつもお茶係なのだ。
「おう、おはよう。ところで野地、お前、釣りをやらんか？」
悦雄に突然、仕事以外の質問をされ、野地はキョトンとした顔をしている。彼にはよほど、悦雄が「堅物」というイメージがあったのだろう。
「釣り、ですか？　以前にフライフィッシングを齧ったことはありますけどね。あまり釣れないもんだから、やめちゃいましたよ」
「お前、沖釣りをしてみる気はないか？」
「はあ、沖釣りというと、船に乗っていく？」
「そうだ。今は貸し道具も揃っているし、気軽に乗れるぞ。今度の日曜日に一緒に行かないか？　会費も初回は俺が奢ってやるよ」
悦雄の顔はにこやかだった。その時の顔は仕事の時、彼が見せる厳しい表情とはまるで違っていた。いかにも愉快そうに野地を誘ったのである。
野地はそんな悦雄の表情に吸い込まれるようにして「はい、行きます」と返事をした。
「初心者が行くんじゃあ、小物釣り、イシモチことシログチで決定だな」
悦雄が勝ち誇ったように田崎を見た。田崎は呆れ顔で悦雄を眺めている。
「まったく、お前って奴は、いつも強引なんだから」
だが、田崎もすぐに笑った。
「さあ、仕事だ」
悦雄が野地の肩を叩く。その表情はいつもの厳しい係長の顔に戻っていた。そんな二人を田崎は微笑んで見送ると、ポケットに手を突っ込んで廊下を歩き始めた。

日曜日の朝、渡辺家は早くから明かりが点いていた。もちろん、釣り支度のためである。そんな渡辺家の居間を覗いてみよう。

「おはよう。昨夜は眠れたかい？」

悦雄が目をこすっている良雄に声を掛けた。悦雄は随分と爽快な顔をしている。いや、悦雄だけではない。房子もまた、爽やかな笑顔をしているではないか。

「何か、興奮して眠れなくってさ」

良雄があくびをしながら答えた。パジャマ姿の良雄はまだ、小学校六年生のあどけなさを漂わせている。

「寝不足は船酔いになりやすいぞ。行きの車の中で寝ていけ」

そう言いながら悦雄がおにぎりを頬張った。大きな口を開けて、さも旨そうに頬張る。昨夜、房子が握っておいたおにぎりだ。唇に海苔が張り付いた。

「ほら、良雄もおにぎり食べて、着替えなさい」

房子が良雄におにぎりを差し出す。良雄がゆっくりとした手の動きで、それを受け取った。

「いただきます」

「しっかり食べておけ。空腹も船酔いしやすいぞ」

悦雄の手には液体タイプの酔い止めが握られていた。良雄のために購入しておいたのだ。

「今日のお昼はサンドイッチだからね」

房子がサンドイッチをクーラーの中に仕舞う。クーラーの横にはポットが置かれていた。その中には温かい紅茶が入っている。随分と風の冷たくなったこの季節には、温かい飲み物が嬉しい。ひとつのポットを家族で分けながら飲む。それもささやかな幸だと思う渡辺家であった。

船宿「黒川釣船店」は金沢八景にあった。金沢八景は釣り宿がひしめく、言わば「釣り宿銀座」のようなものだ。秋口になると、イ

シモチことシログチを釣り物の主体に看板を掲げる宿が少なくない。とは言え、イシモチを専門に沖釣りで狙うのは東京湾くらいだろうか。

釣り宿には既に竿鱗会のメンバーたちが集まっていた。皆、準備に余念がなく、気迫が伝わってくる。たかが小物釣りとは言え、釣りは釣りなのである。

宿の受付の隅の方で、小さくなっている男がいた。野地だ。錚々たるメンバーに気圧されているのだろう。可愛そうにも、肩を窄めているではないか。

「みんな、おはよう」

悦雄が笑顔を振り撒きながら、船宿へ入っていった。後に房子と良雄が続く。房子と良雄も釣りの猛者連に少し萎縮気味だ。

「今日はよろしく頼むよ。あんたがシログチがいいって言ったんだから」

田崎がにこやかな笑顔で悦雄に近寄ってきた。

「ああ、大丈夫だよ。情報では群れも固まりかけているらしい。潮さえ良ければ大漁だよ」

悦雄が田崎の肩をポンと叩いた。そして、隅の方で小さくなっている野地に目をやる。

「よう、おはよう。来たか。沖釣りは楽しいぞ」

「おはようございます。何か、いつもの係長と顔付きがまるで違いますね」

「そうか？　いつも俺は恵比須顔だぞ」

悦雄が豪快に笑った。そして、後ろで恐縮している房子と良雄をみんなに紹介した。すると、猛者連たちは案外と気さくな笑顔を向けたものである。

房子と良雄の顔から、少し強ばりが解けた。

「もう手続きは済ませているから、道具は船に積み込んで」

田崎が悦雄に促す。

「場所は？」

「家族連れなんだし、胴の間でいいだろ？　可愛い後輩も面倒見てやれよ」
胴の間とは船のちょうど中央で、船長の操舵室の前付近を指す。沖釣りで釣り師が争って席取りをする場所は、船尾のトモか船首近くのミヨシだ。胴の間はどちらかと言うと初心者向の席で、熟練者には歓迎されない。それでも、房子と良雄という家族連れには、船長の目も行き届き、もってこいの席だ。それに、今日は声を掛けた手前、悦雄は野地の面倒も見なければならなかった。
船は船つき場で、その身を横たえていた。静かに出航の時を待つ釣り船は、小型ながらもどこか威厳がある。それは、時に荒波をかいくぐってきた歴戦の勇者の風格とでも言おうか。
悦雄たちはその船の胴の間に荷物を置いた。
「今日は凪ですよ」
操舵室から船長が顔を覗かせた。頭に手ぬぐいを巻いた、いかにも職人気質の船長だ。
この釣り宿はイシモチ釣りにこだわっており、夏場の一時期を除き、ほぼ周年イシモチを狙っている。
「初心者には凪がいいね。海が荒れると船酔いしやすいからな」
悦雄が振り返りながら笑顔を見せた。その手はもう、釣竿に伸びている。釣りの上手い人に限って支度は早いものである。
悦雄は房子や良雄の仕掛けもセットする。見れば、野地は自分でセットしているではないか。さすが、以前にフライフィッシングを齧ったことだけのことはある。
続々と釣り人が船に集まってきた。みんな、猛者連なのだが、和気あいあいと、和やかなムードなのが仕立船のよいところだ。
「今日の竿頭は平さんだべー」
「小物なら、負けないぜ」
「そうだよな。お前は大物に限っていつも逃がすもんな」
「あはははは」
そんな会話が気持ち良い。

電車で来ている連中は、早くもビールを空けている。
「なんだ、もう船酔いの準備か？」
悦雄の気の利いたジョークで、船はまた笑いに包まれる。
「何か、今日の係長はいつもと違いますね」
野地がにこやかに笑いながら呟いた。
「いつもは鬼だって言いたいんだろう？」
悦雄のその言葉に、野地が苦笑した。
「お父さん、職場では鬼なの？」
良雄が「信じられない」と言いたげな顔をして、会話に割り込んできた。
「そう、鬼の保護係長、渡辺悦雄って有名なんだよ」
悦雄はやや自虐的に笑った。
「でもね。君のお父さんを尊敬している人は多いんだよ。僕もその一人だからね」
野地がすかさず、悦雄を援護した。
「やめろよ。恥ずかしいじゃないか」
「ちゃんと筋は通すし、部下のフォローもする。だから我々はいつも大船に乗ったつもりで仕事ができるんですよ」
「今日は釣りだぞ。仕事の話はなし！」
悦雄が照れを隠すように叫ぶ。
良雄は父親の意外な一面を垣間見たのだろう「ふーん」と興味深そうに頷いている。房子はその横で苦笑を漏らしていた。
「なんだよ、母さん」
「あなた、相変わらずなのね」
「人間、そうは変わらんよ」
そんな会話をしていると、船のエンジンがアイドリングを始めた。
ドルルルルル。
腹の底に響くようなエンジンの音が心地よい。
「はい。それではこれより出船します。航程は十分くらいです」
船長のアナウンスが流れ、船はゆっくりと桟橋を離れる。船の下

ではエンジンより巻き返す海水が、複雑な渦となっては消えていった。やがて、それは期待を乗せた白泡へと変わっていく。
金沢八景の朝の風は、何物にも代え難い清々しさがあった。

船は橋を二つ潜り、東京湾の海原へと乗り出す。そこで船は一旦、停止し、スパンカーと呼ばれる帆を張る。それからいよいよ、本格的な出航である。
左手に八景島シーパラダイスのジェットコースターを眺めると、右手には大きな造船所のその向こうに、寝坊してきた太陽が燦々と輝いているではないか。
波はない。船はフルスロットルで駆け抜けていくが、飛沫が客にかかることも稀だ。絶好の釣り日和である。

船は沖に出て十分たらずで、減速し、旋回を始めた。赤灯沖と呼ばれる、イシモチのポイントだ。
船長は潮を読みながら、巧みな操船技術を駆使して、魚の群れの上へと船を誘導する。
今の船には魚群探知機が付いている。昔は経験と勘だけに頼らざるを得なかった魚の居場所も、こうして見つけることができるのだ。しかし、魚がいるからと言って、必ずしも釣れるとは限らない。そこはやはり経験がいる。船長にしても、広い海の中を闇雲に捜し回っているのではない。長年の経験と知恵があってこそである。
船が数回、旋回すると船長がキャビンから顔を覗かせた。
「はい、どうぞ。底付近に反応が出ていますからね。仕掛けを落としたら、しばらく馴染ませて、アタリがなかったら、ゆっくりしゃくるように誘ってみてください」
その声を合図に、皆、一斉に仕掛けを海中へと投入した。
悦雄は仕掛けの投入を見送り、房子と良雄に餌を付けてやる。餌はアオイソメだ。ムカデを小さくして、緑色にしたような生物を想像していただければわかりやすいだろう。

「さあ、クラッチを切って」
「クラッチって何よ？」
悦雄がそう言っても、房子は釣り用語がわからず、もたついていた。
「お母さん、リールのレバーだよ。そこを押すんだよ」
言われるがままに、クラッチを切ると、緑色のムカデは踊りながら海底へと沈んでいく。
見れば、野地の竿先が早くも震えていた。野地がすかさず合わせを入れる。釣りでは「合わせ」という動作がある。魚が釣り針に掛かった時、竿を立てるものだ。
「あーあ、野地、それスカだぞ」
悦雄がほくそ笑みながら呟いた。
「あれー、あれほど激しくアタッたのになぁ」
「イシモチは向こう合わせの釣りなんだよ。魚が掛かっても、しばらくは辛抱強く待たなきゃダメだ。少し糸を送り気味でもいいと思うぞ。そのくらいデリケートな魚なんだ」
「へえー」
野地は感心したように頷きながら、仕掛けを上げた。そして餌を新鮮なアオイソメと交換する。
「イシモチって奴は餌の端からネチネチと少しずつ食っていくんで、なかなか食い込まないんだよ」
「まるで、うちの課長の小言ですね」
「あはははは、そう言われてみれば、そうだな」
今度は良雄の竿がガクガクと震えた。柔らかい竿先が海中に突き刺さりそうだ。
「あっ、お父さん、きてる、きてるっ！」
良雄が叫んだ。
「まだだ！」
悦雄も叫んだ。イシモチ釣りに使用する竿は胴調子と言って、竿の中央付近から曲がるように設計されている。だから、魚が掛かる

と、大きく曲がり込むのだ。逆に言えば、それは魚に違和感なく餌を食い込ませるには、もってこいの調子とも言える。
「よし。巻いてみろ」
悦雄の指示で良雄がリールを巻く。
「魚が暴れたら慎重にゆっくりとな」
その間にも竿先はグイグイと絞り込まれ、その軋む音が聞こえてきそうだ。水を切って上がってくる新素材のカラフルな編み糸が滴を垂らす。それが眩しく光る海面に小さな波紋をいくつも作った。
やがて銀色の魚が水面下に見えてきた。それは光を嫌うように暴れまわりながら、もがき苦しんでいる。
「そのまま、抜き上げちゃえ」
良雄は竿をグイと持ち上げると、仕掛けごと魚を抜き上げた。振り子のようになった魚は、キャビンへと勢いよく叩きつけられた。その魚を悦雄がムンズと掴む。
「わあ、イシモチだ！」
良雄が嬉しそうに叫んだ。それは紛れも無く、先日の食卓を飾った魚だったのである。
「その魚、鳴いているわよ」
房子が不思議がるように言った。耳をすませば、イシモチからグーグーという音が聞こえているではないか。
「そう。この魚はグーグー鳴くんだよ。この鳴き声が愚痴に聞こえるからグチって呼ばれるんだ」
悦雄はそんな説明をしながら、釣り針を外した。そしてイシモチのエラブタを露出させると、おもむろにその付け根にハサミを入れた。そうしてイシモチをバケツの中へと放る。するとイシモチは放血しながら、白い腹を見せて浮かんだ。
「あーあ、残酷ーっ」
良雄がその様を見て、思わず呟いたものである。
「どうせ食べる時には、腹を割くんだ。こうして血抜きしないと、生臭くなるんだよ。それに身も締まる」

「それでこの前のイシモチは締まりがなくて、生臭かったのね」
房子は納得したように言った。
「そういうこと。釣ったイシモチは魚屋で買った物とは別物だよ」
悦雄が良雄の仕掛けに装餌をしていた時である。
「私の竿にもきたみたい」
見れば、房子の竿先が震えている。
「おっ、本当だ。まだだぞ。まだ」
悦雄はリールを巻こうとしている房子を制した。
コツン、コツン、ギュイーン。
一気に竿先が絞り込まれた。
「よし、今だ。巻け！」
房子がリールを巻き出す。竿は半月のようにしなり、海中に突き刺さっているではないか。
「デカそうだな」
「重いーっ！」
そう言いながらも、房子の顔は満足そうに笑っている。
海底から水面まで、その距離にして３０メートル程。その間に、魚との駆け引きを存分に楽しむ。それは、釣り人だけが味わえる快楽に他ならない。
一際大きな銀色が水面下で輝いた。
悦雄はキャビンの上からタモ網を手にすると、魚を掬った。網に収められた魚は４０センチはあろうかという、見事なイシモチだった。
「すごいじゃないか、母さん。こんな大物を釣って」
「まぐれよ。まぐれ」
房子が照れるように笑った。
イシモチはグーグーと愚痴をこぼしながら、釣り人を睨んでいる。そのイシモチに悦雄は容赦なくハサミを入れた。イシモチは観念しきれないような愚痴をこぼしつつ、バケツへと放られた。
悦雄は良雄が釣ったイシモチをクーラーに移す。

「母さんの釣ったやつは、刺し身でもイケそうだな」
「イシモチのお刺し身なんて、滅多に食べられないものね」
「そうさ。釣り人だけの特権ってやつさ」
悦雄の顔が自慢げだった。

気が付けば船内、あちらこちらでイシモチが上がり始める。同時にグーグーという、少し滑稽とも思えるようなイシモチの愚痴が聞こえ出す。
「うわっ！」
思わず叫んだのは野地だった。
「どうした？」
ようやく自分の釣り支度を始めた悦雄が、目を野地にやった。
「このイシモチ、小魚を吐き出しましたよ。イシモチって、小魚も食べるんですねぇ」
「ほう」
悦雄が珍しいものでも見るように、野地の釣ったイシモチと、それが吐き出した小魚を眺めた。
「本当だ。俺も噂には聞いていたけど、イシモチが小魚を吐き出したのを実際に見たのは、初めてだな」
「したり顔でちゃっかり弱い者を襲うところも課長そっくりですね」
「野地、お前、相当、課長のこと嫌いだろう？」
「わかります？」
「あはははは、愚痴れ、愚痴れ。イシモチみたいによ。課長のネチっこい厭味は腹黒い『クログチ』だけど、俺たちのは水に流す真っ白な『シログチ』よ」
悦雄が豪快に笑った。
「あら、それなら、私だって愚痴らせてもらうわよ」
房子がニヤッと笑った。
「おお、今日はいい気分だから、どんなことだって水に流すぞ」
悦雄が仕掛けを海中に放った。青とも緑とも言えない海面は太陽

が反射し、生命の営みを感じさせる。それは目が眩みそうな欲しいほどきらびやかで、一時たりとも同じ形を留めてはいない。
「僕は受験勉強のために家庭が、学校生活が壊れていくような気がしてならないんだ。中学受験も水に流していいかな？」
竿先を見つめていた良雄がボソッと呟いた。
「んー」
悦雄と房子が顔を見合わせながら言葉に詰まった。野地はそんな親子を笑いながら眺めていた。
「確かに受験で歪みが出ているのは確かだ。でもせっかくここまで頑張ったんだから、受験は頑張れよ」
悦雄が竿を煽り、誘いを入れながら言った。
「そうねえ……」
房子も同意する。
「私立の中学に行けば、高校受験はしなくていいんだぞ。その分、家族の時間も増える」
悦雄が満足そうに言った。次の瞬間、竿先を見つめていた良雄の目が輝いた。
「きたっ！」
良雄は慌ててリールを巻く。
「ちぇっ、ずるいや。お父さんだけ、いつもこんな楽しい思いをして……」
「なら、中学に合格したら、毎月、釣りに連れていってやるっていうのはどうだ？」
「家族で釣りっていうのもいいわね」
房子が同調する。良雄のモチベーションを高めるためにも、そして、家族の絆を取り戻すためにも釣りはもってこいのようだ。
良雄がイシモチを抜き上げた。イシモチはグウグウと愚痴を漏らしている。悦雄が鰓に鋏を入れた。
「場所変えします。仕掛けを上げてください」
船長のアナウンスが響く。皆、一斉に仕掛けを上げた。

船が微速で動き出した時、悦雄はイシモチを一匹、捌き始めた。持参したまな板の上で、小出刃包丁を使い、器用に三枚におろしていく。腹骨をそぎ落とし、血合骨のところで左右に身を分ける。

「どうだ、これがシログチの刺身だ」

「あの鮮魚コーナーのイシモチと同じ魚？」

房子が透き通る身を覗き込みながら、尋ねた。

「そうさ。ただ、これは釣り人だけが口にできる特権さ」

悦雄は醤油まで用意していた。

「ああ、美味しい。鯛より上等かもしれないわ。甘みがあって」

「本当だ、旨い」

イシモチの刺身を口にした房子と良雄が、目を丸くした。

「おう、野地も食ってみろ」

野地が恐る恐る、イシモチの刺身を口に運ぶ。だが、すぐに驚嘆の表情へと変わる。

「旨いです」

「そうだろう。シログチは刺身が一番という人が多いんだ」

「愚痴を吐き出すと、旨い身になるんですかね」

「そうかもしれん。さあ、俺たちももっと愚痴を吐き出すぞ」

悦雄が豪快に笑った。イシモチのつぶらな瞳が恨めしそうだった。

（了）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4121i/

シログチ

2010年10月8日15時16分発行